



会津坂下町には只見川と阿賀川が流れ込み、会津盆地の中でも屈指の米どころである。米作の土地には五穀豊穡を願う祭礼が伝わっているものだが、ここでも米どころにふさわしい奇祭が古くから行われている。

江戸時代に著された「新編会津風土記」によると、「蒲生氏の時代、寛永二年（1625）この地を町割りし、毎月六度の市日を定めた。毎年正月十四日を初市とし、十五歳より六十五歳までの農民が上下二組に分かれ米俵を引き争い、勝負に従い米俵の高低を占った」とある。

明治維新前の坂下町は、上町、中

町、下町と町割されていた。初市は旧暦の正月十四日に開かれ、大俵引きは郷頭の屋敷（現在の役場地区）を中心にと下を分けて行った。

この大俵引きで勝った側に翌年の市（露店）を立てるとり決めになっていたといわれている。

当日の俵引きに参加する引子たちはふんどし一本に素足といういでたちで、活気に満ちた勇壮なお祭りだったらしい。同じく「新編会津風土記」の中に、「是は是国の旧俗にて府下大町より以下所々あれども、此地の壯観に比するものなければ来見るもの尤も多し」と、往時の俵引きの様子が記述



坂下で正月が来ると、すぐ大俵引き。体が自然にそわそわします。

直径二m、長さ三・四m、重さ三七の大俵が右へ左へ。引子の熱気と群衆の歓声が交錯する。江戸時代に生まれた勇壮なる奇祭は、町民たちの熱意で復活。今や町の新春の風物詩になっている。

大俵引き